

## 川柳と技術

此頃の短日に取まぎれてつひ迂濶として居る隙に早くも編輯の締切らるゝ最後の日取りとはなつたが、さて受合つた義理を何う果すべき種がない、あつたかも知らぬがちと無關心に通り過したので、今更兎角の思案に及ばぬ。あてがわれた原稿紙を前にして頻りと煙管を脂下つて見たが追付かぬ。古川柳氏はこんな場合をうまく扱つて『智慧の出るまでは

煙管を廻してゐる』などは流石に鮮やかなものだなど、不圖飛んだ方角へ氣が外れ出すと、尙更以て堅苦しい問題へ頭を扭向けにくゝなる。まゝよ古川柳と技術との交渉をても無理に拮繰つて頁數だけの申譯を立て、了へと聊かぢれ氣味の態、其處を素早く『あぶられて五臓をしぼる安煙管』などゝ又しても川柳氏の皮肉が憎いではないか。

とは云ふものゝ幸か不幸か、今の所謂技術家なるものを皮肉るべく時代に於て餘りに懸隔して居る古川柳氏の口から直接技術との交渉を聞出さんとするのは、それを至難の沙汰であつた。たゞ聊かの似寄りを心當てに大工や左官の題

下をでも捜して見たらばどの見込も外れて、其處には下らぬ  
駄洒落式のものを除ては存外讀み應へがない。まづは  
鋸屑噛みく、大工研いてゐる言川敷の行へる  
屋根葺きは四五寸先も一つ打ちぬてゐるもの  
くらひの處が即興即吟の體を得たるもので

等々其わらんじをはくと二足踏んで見る  
などが僅に踏査にても出かける土木屋さんのスケッチでも  
あらうか。併しながら

煙草飲むうちも思案の庭作り  
などは髓に我職分に忠實なる技術家の面目を發揮して餘蘊

なきものと云はゞ云ふべし

柿の皮かうむくものと立つて見せ

に至つては如何にも得意げな技術家の手腕がさながら目に  
見るやうに寫し出されてぞつとする程面白い。尤も剝ぬた  
柿の實の甘さうなのは屹度他人にしてやらるゝものと知る  
べし。然り而して又一句

井戸替は深さを横に見せるなり

などは恐らくはこれ技術其ものゝ眞價を巧に道破したるも  
ので、底知れぬ科學の深みを素人目にも合點の行くやう横さ  
まに曳直して見せる呼吸が確に技術の心髓ではあるまいか。



を値する點があらうとも、それを寧ろ却て我技術の尊とを發揮する所以と、無論斯う云ひ切るだけの強みはある。併しながら

ものさして足らぬくと叩いてる

斯う豫算が不足では我々の長計も所詮實現の時を知らずと、つひがつくりとするやうになると、直ぐさま川柳氏の付込む所となる

揃つて尻餅井戸替の綱が切れ

豊心細からざるを得んやだ。況や

叩かれて晝の蚊を吐く木魚かな

斯う御互に無雜作に叩出さるゝに至ては、そも何とならうぞ

御自分も拙者も逃げた人数なり

不景氣も斯うまてとは思ひもかけなかつたが。さて歎いても今更是非がない、これも時節じや

後の月時なるかなと負けるなり

此處に至つては、只もう先輩の努力がたよりじや、是非斯界の爲めに大に氣を吐いて貰はねばならぬ、又我等の爲めに新しい發展を策して貰はねばならぬと

ぶら下り又ぶら下る井戸凌ひ

處が何うじや此點にかけては我先輩も又存外に押しが利か

大木になつても何處か柳なり

豊心細からざるを得んやだ。自體技術と云ふものは初手からこんな無力のものだつたのであらうか、こんな埒もないものだつたのであらうかと、斯う我から弱身を見せてかゝると尙更川柳氏の皮肉は猛烈である。

葱ばかり喰ふも一足ちがひなり

今頃になつて騒いで見た處で取かへしが付くものではない。甘い汁を吸はふとならばたゞ今一足早く出懸けて來ればよかつたのだ。由來技術と云ふものは誰が何と云はふともま

づ斯うじや

絲卷の向ふに亭主踊つて居

内儀さんから云ひ付かつた通りに紺の木綿絲を雙の手に卷付けて内儀さんの絲卷の動くにつれて踊つて居るのがまづ御互ひの運命じや。一體は内儀さんよりも亭主に威勢のあるべき筈じやが、その亭主が案内律義過ぎ穩和し過ぎるからして斯うもなる。だがそれも是非ない仕儀今頃になつて急に技術の世界が狭い／＼とわめいた處で、それも畢竟我尻をいはず盟を小さがりゝの類ひじや。止みねくゝ

河豚汁を喰はぬたわけに喰ふたわけ

何ちらにした處が世の中にさう善いこと許りが轉つて居るものではないとかう悟つて、それもまだ不得心とあれば是非なし

狸の遺言茶釜には化けるなよ

まあ御互ひの子供だけは技術家にはせぬことだよ。

技術生活より終